裏見（うらみ）の西洋女性史・覚え書（一）

大江一道

はじめに

「うらむ」（恨む）ということばは、「うら（心の奥・裏）ミル（見る）」ことだという。その「うらみ」を、方法として自覚的に使うならば、文化の裏＝深層をより以上に明らかにできるのではないか。[1] 歴史の解明にもまた、この方法の適用が待たれていよう。

ところで、「男性史」などというものがないのに「女性史」は存在する。それは、「女性史」が、書かれた歴史に対する〈異議申し立て〉として登場した抗議（プロテスト）の歴史であるからだ。これまで、歴史といえば、成人した男どもの活動のはなしであって、女・子ども（それに老人も）は、ほとんど、あるいはまったく無視されてきた。階級闘争や革命の歴史においてさえそうであった。そんな「歴史」が「歴史」であってよいのか、という抗議の〈陳述〉として、「女性史」を「独立」させようという意志が、女性史研究や女性史的叙述を生みだしたのである。「女性史」は、まさに、男が選択し評価し叙述した事実の体系に対する、女の「うらみ」の方法として、なお存在理由をもつものといえよう。

歴史学にかぎらず、総じて学問が古代から、とりわけ近代以降、いよいよ「女・子ども」の排除の上に成り立っていた、という事実への反省が、いま男性自身にもようやく深まりつつある。では、従来のような男性本位のオモテの歴史を、ウラから、女性の側から見直すには、視座をどこにおき、視線をどのようなところにむけたらよいだろうか。

じつは、女性の地位がどうであったかが、しばしば、一国あるいは一時代の文明を判断する手だてになるものである。そして、その女性の地位とは、すぐれたイギリスの女性中世史家アイリーン・パウアもいうように、理論上の地位、法的身分上の地位、また日常生活における地位と、現われ方はさまざまで、相互に作用しあいながら、完全に一致することがないまま今日にいたっていることは確かである。[2] 人類の半分が、いやそれ以上が、いつの時代にあっても女性であった。その女性に、事実としての歴史がなかったなどということは、とうていありえない。住み、暮し、働き、創り、交わり、たたかい、喜び、嘆き、そして死んでいった女たちの、生の厚みが、事実の歴史としてずっしりと残されている。

しかし、支配する性としての男性が、その生の厚みに視線をむ

けずに、記録（史料）に残された――その道具としてのことばと文字もほとんど男性が独占した――王侯、英雄、武将、商人、大思想家等々、自分と同性のものたちの業績・行動を、書かれた歴史としてあみあげたのだった。たとえ女性がそこに登場しても、添えものか付属品でしかないような、男性だけにしか歴史がなかったかのような錯覚が、こうして生じるのだ。もっとも、その男性さえ「蛮族」、「未開人」、「歴史なき民」などと、十把ひとからげにひっくくられて、歴史から排除されてきたのだから、歴史とは世にも恐しい悖えものではないか。[3]

女性は、たしかに性支配と階級支配の二重の抑圧のもとにおかれ、理論上、法制上、日常生活上で、長い間、受動と負の歴史を背負わされてきた。ただしそれが、世界のどの地域、どの民族でも、またどの時代をとってみても、金太郎飴みたいに同型・均質であったと見るわけにはいかないだろう。人類に普遍共通の女性史というものが成り立つかどうか、今のところは発問の段階にあるところだろう。さしあたりは、世界をいくつかの地域ブロック、民族ブロックに分けてみて、さきにあげたアイリーン・パウアの三つの観点などを作業仮説にして、個別ごとにたしかめていくことから始められるべきだろう。[4]

西洋は、ゼウスを主神としたギリシア神話の成立の時代から、父権体制が支配し、男性原理が優越した世界であった。しかし、そのギリシア神話においても、多数の女神たちが圧倒的に重要な地位を占めているように、母権的宗教、女性原理が対称軸のだいじな極をなし、両者の緊張があのギリシア古典文化の創造の契機となったのであった。[5] 男性原理、男性価値が優越した西洋の歴史と文化のオモテを見るのでなく、そのウラに、その奥＝深層に、視線をむけることによって――すなわち「うらみ」の噴射だ！――、女性の地位を明かにし、これまでの書かれた歴史、つくられた文化を、批判的にとらえなおす拠点を発見したいと思う。

（一） 人類最初の女性パンドラ

ご承知のとおり、ギリシア神話はいきなり女性を諸悪の根源として描きだす。ゼウスの命令で技術の神ヘパイストスが土と水とを混ぜあわせて美しく愛らしい女性をつくり、パンドラという名前をあたえる。ゼウスのねらいは、天から火を盗みだして人間にあたえたプロメテウスの、けしからぬ行為への仕返しとして、人間の災となる女を造らせ、地上に送りとどけようというわけなのだ。

さて、ヘパイストスがつくったパンドラの女体には、美と愛の女神アフロディテが、頭から魅力をたっぷりとふりかける。また、アテネは機おりの技術を教え、ほかの女神にも手伝わせて、きれいな衣裳と飾りでいやがうえにも美しく装わせ、申し分のない女性となる。ただしゼウスは、メッセンジャーボーイ的なヘルメス神に命じて、パンドラのなかに「犬の心と盗人の性」（キュネオン・テ・ノオン・カイ・エピクロポン・エトス）を入れさせ、さらに嘘と甘言を詰めこませるのである。「犬の心と盗人の性」とは、「恥知らずの心と奸知にたけた性質」と意訳できる。いやはや、恐ろしく女性蔑視の人づくりであった。神からの贈りものとして、美と悪のアンビヴァレント性を具有した人間の最初の女性パンドラが、プロメテウスの弟エピメテウス（意味は「遅まきに

気づくウッカリ者)のところへ運ばれ、兄が受けとるなといっていたのを忘れて自分の妻にしてしまう。

パンドラがもってきたカメの中には、病気をはじめあらゆる災が入っていたのだが、その重い蓋をパンドラがあけたために災が全部とびちって、人間は不幸になってしまった。パンドラがいそいで蓋を閉めたので、ただ一つのものが残った。それが希望であった、というのが、女性の誕生にふれたギリシア神話の有名なくだりである。[6] この神話は、紀元前八世紀の詩人ヘシオドスが、『仕事と日々』および『神統記』のなかで語っているもので、ヘシオドスの女性嫌いがあらわれている、と見る向きもある。これに対してイギリスの女性神話学者J・ハリソンは、パンドラという言葉は「すべてのものを与える女」という意味であると考えて、そこに、ギリシア人が半島に入る前からエーゲ海一帯で農業をいとなむ人々が信じていた、大地母神的なものだと考えている。ふつうは「神々すべて(pantes)が贈物(dōron)を彼女に授けた」、あるいは「神とすべてが、彼女を贈物として人間に与えた」ので、pandora というのだ、と説明されている。

ヘシオドスという詩人は、自分が生きている時代は昔より悪くなっていると考えていた人であるから、全体に調子がペシミスティックである。このパンドラの話も、どう解釈するかは男の立場と女の立場でちがってくるだろう。男のヘシオドスの考え方は、パンドラに始まるすべての女性はおしなべて男にとって災の根源だが、それでもなお男には、その災と天びんにかけてよいほどの喜びを与えてくれる良い妻をめとる可能性(希望)が残っている、ということではなかったか。あるいはまた、人間は一寸先は見えず、襲ってくる災をとらえることもできないが、それでも未来に希望をもつことができるはずだ、なぜなら神々の贈物の女性の「パンドラ」には、希望だけはしっかりと残されているのだから、ということではなかったか。

(二) アリストファネスの女たち

古代ギリシアは、まったく男性支配の社会であった。そのなかにあって、男の利害関係が動機にはたらいているにせよ、ギリシアの国政を女の立場からとらえたらどうなるか、という逆転の思考を男がこころみるという、古代世界ではまれにみる実験が、喜劇詩人のアリストファネスによってなされた。

アリストファネスは、前五世紀の後半からの六四年間の生涯をアテネだけで過した、生粋のアテネッ子で、二〇歳のときから劇を書きだし、パロディの痛烈さにおいて当代随一の人であった。少くとも四〇篇の劇を書き現在残っているのは一一篇であるが、そのなかに、幸いにも女たちを主人公にした喜劇が三篇ある。発表順にならべれば、『女の平和(リュシストラテ)』(前四一一年)、『女の祭(テスモフォリアズーサイ)』(前四一〇年)、『女の議会(エクレシアズーサイ)』(前三九二年)となる。[7] この三篇に共通しているのは、男性による女性蔑視ないし軽視を、男性自身が逆手にとって男どもの政治のやり方を痛烈に批判したことである。「女のうらみ」、つまり女のウラを見ることから、アテネの、広くは全ギリシアの社会を見直そうという方法を、前五世紀の末ごろに演劇の方法として使っていた男がいたというのは、まことにおどろくべきことではあるまいか。アリストファネスが『女の平

和』を書いた動機は、かれが一三歳のときから始まったスパルタとの戦争（ペロポネソス戦争）を、もういい加減でやめてもらいたい、という思いからであった。女性が参加できず、その意思をあらわすことのできないポリスの直接民主制の、合法的手続にもとずいて戦争がいつはてるともなく続いているのに憤慨して、アリストファネスのパロディ劇がうまれたというわけだ。これらの劇は、後世のリンカーン大統領の言い廻しをもじれば、男性本位の民主主義に対する、「男の、男による、男のための批判」なのである。

『女の平和』は、男たちがいつになっても戦争をやめないのに腹を立て、若い美しい夫人リュシストラテが、夜明けのアクロポリスの入口に立って、集まってくる女たちを待つというところから始まる。彼女の計画は、男たちをセックス・ボイコット戦術で降参させ、和平を結ばせようというのだ。敵側のスパルタの女たちにも呼びかけて、アクロポリス占拠という非常手段をとってここに女たちを全員立てこもらせる。男たちはブドウの枝を焼いてけむらせ、いぶり出しにかかるのだが成功しない。そのうちに、男たちのなかには妻恋しさに丘のふもとまで子どもと奴隷をつれてやってくる。女たちにも、夫恋しさに脱落しかかるものがでる。しかし、強い女性もいて、夫のいうことをきくようなフリをして、敷物がなければ寝れないといい、夫が敷物をいそいそととってくると、枕がなければダメだとじらし、あげくは平和になるまでお預けね、と引上げてしまう。スパルタでも同じことになって、とうとうスパルタから使節がやってきて、もうこれ以上セックス・ボイコットは我慢できないから和平を結ぼうと口上をのべ、リュシストラテが双方の和睦をとりもって、めでたく和平到来となり、歌い踊りつつ幕となる——。

アリストファネスの劇はかなりエロティックで、ひわいなセリフのやりとりも多いが[8]、それは、批判の政治的攻撃性をつつむオブラートのようなもので、それがあったればこそ戦争中なのに反戦劇を大っぴらに市民の前で上演できたのだろう。戦争で夫や子どもをなくし、あるいはスパルタ軍に攻めこまれたりして、つらい思いを一番するのは女たちなのだから、この点で、平和主義者のアリストファネスは思想的に女性と同盟できたわけである。前四一一年の春、ディオニソス祭に上演されたこの劇を見終わった市民たちの、その夜の夫婦の会話がどんな調子であったか、それを知りうる史料はまったくない。ただ、ペロポネソス戦争が終るのは、それから七年後のことであった。

戦争が終っても女性不在の政治は続いた。そういうなかでアリストファネスが書いたもう一つの傑作が『女の議会』である。この劇は、男装した女性たちが民会を占拠し、共産制度と、婦人共有、というよりも女たちの男子共有の社会をいっきにつくってしまうという、現実倒錯のおそろしく奇抜な発想によってつくられた喜劇である。この劇も「女のうらみ」を考える材料としては、まことに貴重である。

では、なぜこのような劇が出現したのかを知るためには、古代ギリシアにおける女性の社会的地位を理解しておかなければならない。あの哲学者プラトンは女性に理解があったほうで、彼がアテネの郊外に建てたアカデメイア学園[9]には、女性も何人か学んでいた、つまり学ぶことができたという。そのプラトンでさえ、

「女というものは人間の中で非力なるがゆえに陰険な族（やから）」といっているほどで、アリストテレスにいたっては、「男子は優位に立って支配するもの、女子は劣等にして支配されるべきもの」と述べている。これは、現実の社会関係が投影されているにほかならない。

（三）ギリシア民主政と女性

ギリシアの社会の基礎は「オイコス」、すなわち「家」であり、家の存続のために女性がだいじな務めをはたす、ということになる。[10] 結婚も、嫁入りの際の持参金の額を男の側は評価し、女の側は相手の家の社会的評価や財産などを考えて、父親どおしがかってに決めるのがふつうで、一般市民の間で恋愛結婚などができる余地はなかった。女は一四、五歳で嫁ぎ、相手はだいたい三〇歳前後。[11] 妻となって家庭に入ると、二階建てなら二階に、一階建てなら奥まったところの女部屋でくらし、人の噂さにのぼらないような暮し方をするのが一番よいとされていた。役割分担ははっきりしていて、夫は農作業、政治、食事などみな戸外での活動に従事し、食料買出しも男の仕事であった。買ったものは奴隷に持たせて帰らせ、自分は一日中外で運動・議論・読書などをするというわけだ。

女性は家で育児、家事万般にはげむのであるが、現代の家庭における女性の地位とちがうところは、第一に、家庭は生産の場であって、穀物を粉にひいてパンをつくることから、日常の衣服も糸紡ぎから機おりまで女性が生産労働にたずさわっている、ということである。第二に、市民はたいてい一人ないし三人ぐらいの奴隷をもっていたから、主婦はこの奴隷に家庭内での作業をさしずし、自分も働くという管理能力を身につけていた。さらには、夫と妻の年齢差が大きいこともあり、戦争などが重なれば、夫に先立たれる妻も少なくないわけで、子どもを抱えた貧しい階層の未亡人のなかには、乳母、日傭い、ぶどう摘みなどの仕事について生計をたてるものもあった。だから、ギリシアの女性・妻たちは、生産労働にもかかわりつつ社会のなかでかなりのウェイトを占める存在であったのだが、にもかかわらず、公的生活からはまったく排除されていたのだから、不満がうっ積するのもむりはなかったといえよう。まして男たちが、「遊び女は快楽のために、妾は日々の身の廻りの世話のために、正妻は嫡出の子をうみ、家の中で信用できる番人たらんがために存在する」などという考えでかってなことをしているのだから、妻たちの唯一の反抗手段として、見つかったら相手ともども大変なことになるのは覚悟で〈姦通〉にむかうのは、やむをえないことであった。

スパルタの女性は、子どもは親の私物でなく国家公共のもの、と考える国家のことだから、強い子をうむためにも、結婚は同じ年齢の男とするほうがよいし、若い妻をもつ年をとった夫の場合、パリッとした青年を見つけて、妻にその青年の子をうませ、夫婦の子として育てるということもあった、という。戦争で留守がちになるので、事実上一家の主としての権限が大きかったことや、性的放縦が目立ったということは、軍事国家スパルタゆえの特徴とみられる。ギリシアの他の多くの国々は、スパルタではなくアテネに似たりよったりだったと考えられる。

さて、こういう事情を念頭においてアリストファネスの『女の

議会』をみると、現実のアテネの、男たちによる公的生活への風刺のねらいがはっきりしてこよう。『女の平和』から一九年後の前三九二年にこの劇が上演されたわけだが、アテネの民主政治も社会も、二七年もの戦争に敗北したあとの傷跡は深く、方向舵をなくした船の姿にも似ていた。こういう環境のなかでの祝祭劇である。なにかパァーッとおもしろく盛り上げようというので、実際にはありえない女だけの議会とそこでの決議のフィクション化がこころみられたと思われる。「女湯」をのぞく心理がこれには働いている。だが、観劇する市民たちにとって、この劇が提供する共産社会と婦人共有のイメージは、共感可能のものであったのだろうか。

この『女の議会』の目玉の思想はアリストファネスの独創か否か、というのが、昔から問題になっているところである。なぜなら、プラトンの『国家論』でもほぼ同じことがいわれ、二人とも同時代の人間であるので、どちらかがどちらを真似たのか、それとも無関係にこの思想がでてきたのか、ということになるからだ。婦人共有だとうまれてきた子はどうなるのかという疑問を、プラトンは、親のほうから「男子が花婿になって以後七～一〇か月目にうまれた子を、ことごとくおのれの子どもとみなす」と書き、アリストファネスは、子どものほうから、主人公の男装した女性プラクサゴラのことばとして、「大丈夫ですよ、誰でも自分の年長者をその父とみなすでしょう。」といわせている。プラトンとアリストファネスの議論の比較については、ギリシア史研究の碩学村川堅太郎氏の解説[12]がくわしいが、それによると、とにかくアテネではそのころ、私有財産の否定とか婦人共有論が知識人の間ではわりあい語られていたという。経済的に貧富の差が大きくなりつつあったこの時期に、ポリスのまとまりがくずれると大変なことになるという危機感から、このようなユートピア的理想国家が構想されるようになった、と見てよいようである。

国家・社会の危機は、つねに女性の地位の見直しをせまる。アリストファネスやプラトンの時代に女性の地位の見なおしがおきたのも、まさにポリス国家の危機の深さを意味している。悲劇詩人エウリピデスのように、当時としては例外的なほど女性に理解をしめし、女性の側に立ったものもいた。アリストファネスの立場は、民主政治との関係からいってもむしろ保守派であって、エウリピデスとは対抗的位置にあり、『女の祭』は、そういう反エウリピデスの姿勢をあらわしたものである。そのアリストファネスが、たとえフィクションとはいえ、国家至高の祭典に、婦人問題を国制レヴェルにおいて扱わなければならなかったところに、危機の深さが感じられるのである。

観客である市民は、共産社会にも婦人共有制にもなりっこない、という安心感、話題の非現実性の上に立って、この劇のパロディーにおもしろがったことであろう。これは女性たちにとっても同様だったと思われる。アリストファネスの、「女のうらみ」をフィクション化する仕方の特徴は、共同体内の女性集団の共同行為を通じての目的実現、という形をつねにとることである。女性の解放を、一個の個人として、人間として実現する、というような視点はない。ここに、すべてにまさってポリスという共同体が優先された古代ギリシアにおける、女性の地位と役割についての評価の特徴がよくあらわれているだろう。

註

(1) 本誌『フォーラム2——小特集＝女性と文化』（一九八四年）に掲載の、川本隆史「女・うらみ・文化——〈女の文化学〉スケッチ」をぜひ参照されたい。

(2) Eileen Power, *Medieval Women*, edited by M. M. Postan, Cambridge University Press, 1975. 邦訳、アイリーン・パウア、中森義宗・阿部素子共訳『中世の女たち』思索社、一九七七年

(3) 「歴史なき民」史観への鋭い批判として故・良知力氏の『向う岸からの世界史——一つの四八年革命史論』未来社、一九七八年が必読の文献となろう。

(4) 岡　正雄・江上波夫・井上幸治監修の『民族の世界史』シリーズ（全一五巻）はおもしろい企画であるが、全巻が女性の問題も扱っているというわけにはいかない。第八巻の『ヨーロッパ文明の原型』では、谷泰氏の「キリスト教とヨーロッパ精神——とりわけ女性的性をめぐって」が有益である。

(5) 藤縄謙三『ギリシア文化の創造者たち——社会史的考察』筑摩書房、一九八五年。とくにその第一章「ギリシア文化の基礎的構造」を参照。

(6) 吉田敦彦『ギリシア文化の深層』国文社、一九八四年。その第三章。同『ギリシア神話の発想』TBSブリタニカ、一九八一年。その第六章と第七章。

(7) 『世界古典文学全集12、アリストパネス』（筑摩書房、一九六四年）にこの三篇の邦訳が収められている。

(8) アリストファネスの性表現の本質についての鋭い言及は、吉田敦彦氏の前掲『ギリシア文化の深層』第一章「喜劇の性表現とユートピア」を見よ。

(9) 廣川洋一『プラトンの学園アカデメイア』岩波書店、一九八〇年。一〇四頁、一〇五頁。

(10) 桜井万里子「古典期アテナイにおける女性の地位と財産権」（弓削達・伊藤貞夫編『古典古代の社会と国家』東京大学出版会、一九七七年所収）参照。

(11) 以下、ギリシアの女性の「女の一生」については、太田秀通『ポリスの市民生活』（河出書房新社編『生活の世界歴史3』一九七五年）を参照。

(12) アリストファネス、村川堅太郎訳『女の議会』、岩波書店（岩波文庫）、一九五四年。この訳書に添えられた周到な解説が有益である。

（おおえ　かずみち・専任・西洋文化史）